
マグネティック・フレンド

堕璃尾有人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マグнетイック・フレンド

【Zコード】

Z76560

【作者名】

墮璃尾有人

【あらすじ】

三八歳の松岡雄介は十五年間勤めた会社を退職直前に社内でのライバルだった原口の死に直面する。原口は松岡を退職に追い込んだ張本人だった。しかしあ通夜の席、原口未亡人から原口の松岡に対する友情を聞かされ、動搖する。さらに、会社から原口の後釜に座るようになって要請がある。会社は抜群の待遇を用意し、原口の遺書も利用して引き止めを図る。そこで松岡が取った態度とは・・・

その年の猛暑は異常だった。最高気温は都心で三九度を超えて、ヒートアイランド現象がますます激しくなっている。港区にある通信系専門商社「アブロードコミュニケーション」の本社ビル内部でも、夜八時を過ぎると省エネ対策もあってエアコンが効かず強烈な蒸し暑さが滞留していた。

そんな中、松岡雄介は十四階フロアーの隅にある在籍人数五人の特別業務室で、アブロードコミュニケーションの社員として最後の瞬間を迎えようとしていた。既に夕方五時には同僚向けの最後の挨拶を済ませ、もくもくと机の私物整理をしている。転職を決め、次の会社への出社日はほぼ一ヶ月後の九月一日。それまでは有給消化である。通常、日本のサラリーマンは病気をするか、転職までの有給消化期間でない限り、一ヶ月もの長期の休みはなかなか取得できない。そんな満喫するはずの休みを控えていても、彼の表情は全く冴えなかつた。

新卒で入社して十五年、今年で三十八歳になる松岡は、過去の資料を見ながら十五年間の会社生活を振り返つた。彼の十五年は、会社にささげたと言つてよい。がむしゃらに走ってきた。出世競争にも勝ってきた。ライバルにも勝つて、勝つて、勝ちまくってきた。ただ一人の男を除いては。

原口大吾・・・松岡とは同期入社だった。入社当初の配属、どちらかといえば目立たない部署であるカスタマー部に配属された松岡に対して、原口はエリートコースとも言える営業第一部。しかし、目立たない部署とはいえ、松岡は出世して給料を上げなければいけない理由があつた。松岡は熱心に業務に邁進、注目されない部署にいることで逆に実績を上げやすくなり、気がつけば出世コースに乗り、同期の中では原口に次いで一番目に管理職昇進の栄誉を得る。しかし、そこまでだつた。コールセンター専門会社立ち上げプロジェ

エクトで、本来コールセンターの部署であり専門部署であった松岡は、営業部で華々しくやってきた原口と立ち上げ方針で完全に対立する。そして周囲を巻き込んでの社内闘争は原口に軍配があがり、松岡は完膚なきまでに敗北した。しかも、原口の働きかけによってカスタマー部での居場所もなくなり、左遷の憂き目にあつ。人並み以上についてしまったプライドを維持するには、特別業務室と言ふ名のあってもなくても良い部署はつらすぎる居場所だった。

原口さえいなければ俺は完璧に出世コースに乗っていた。松岡は何度歯噛みしたかしれない。しかし、原口の実力者を巻き込む政治力、特にキーマンの支持を得るパワーは松岡にはまねの出来ないものだつた。実務派である松岡がいくら完璧な資料を作り、周囲を説得に走つても原口の政治力に踏み潰される。いつしか、原口は松岡の恨みの対象となつていた。

そんな嫌な記憶をたどつていると、この閑散とした部署にはほとんど姿を見せたことのない原口が颯爽として近づいて来るのが目に入った。スラリとした体型、体から放つ自信に満ちたオーラ、男性モデルと言つても通用する程の整つたマスクは女性のみならず男性の目も引く。やや太り気味で冴えないメガネをかけた、女性にもほとんどもない松岡とはルックスからして対照的だつた。

「おっ、こんなところにいたか。」

原口は松岡を見つけると、軽く笑みを浮かべながら近寄ってきた。

「今日で最終出社なんだな。長い間お疲れだつた。」

原口は、これまでの松岡との確執を感じさせない笑顔を見せた。しかし、松岡にはしこりがある。

「こんなところに来るのは珍しいな。エリート社員は会社のゴミ捨て場には近寄らないのにな。」

口下手な松岡の、精一杯の嫌味だつた。原口はそのせりふは全く耳に入つてないかのように、慣れなれしく松岡の肩を叩いた。

「コスモス通信に転職すると聞いたが・・・向こうでも頑張れよ。あそこはあまりよい評判は聞いていないが。この間、社員が新聞に

載つてたよな。強引な営業の末、乱暴を働いたとか・・・松岡は、いい意味で新聞に名前が載つてくれよ。この会社の出身者で犯罪に手を染める者は見たくないからな。」

遠慮無くモノを言つ原口に対し、松岡は唇を噛みしめる。そう、松岡の転職先コスモス通信は、業界でも強引なやり口で評判の悪い会社だった。しかし、待遇面と考え合わせると、この不況のおり、転職先は選べない。松岡は不愉快な顔をすると、黙りこくつた。原口は一秒にもこんな場所にはいたくないとばかり、さつときびすを返すと足早に立ち去つて言つた。

松岡は長期休暇の初日、姉の入院している病院への道を歩いていた。（突発性拡張型心筋症）姉は難病の持ち主だった。難病ゆえ、入院費用は高額になり、入院期間も十六年近くと長期に渡つていた。松岡の両親は町工場を経営していたが、松岡が十一歳の時に倒産、両親は大きな借金を抱え自殺した。両親の借金問題で親戚とも絶縁状態であつた姉弟は一人だけで生きていく事を強いられる。姉は高校を辞め、アルバイトをして一人の生活を支えた。そんな松岡にとって、姉は松岡の両親であり、師匠であり、親友だった。そんな姉の面倒を見るのは松岡にとって疑念の余地の無い、息をするのと同じようなごく自然なことだった。

「姉貴。具合はどう？」

一週間ぶりの見舞いだが、姉はいつもと変わらない様子だ。松岡が部屋に入つていつた時、姉は熱心に文庫本を読んでいた。

「これ、村上春樹と貴志祐介」

松岡は著名な小説家の新刊単行本が入つた紙袋を棚の上に置く。姉はそこでようやく気づくと松岡に対して笑顔を向けた。

「雄ちゃん！ ありがと。今度の貴志祐介の小説は長く楽しめそうだね。」

姉は袋から単行本を取り出しつつ、目を輝かせた。入院生活の長い

姉にとつて、唯一の娯楽は読書だ。特に、小説が心の拠り所で、月に二十冊以上のペースで読む。残念ながらほとんどは新古書店での購入になるが、たまにこれぞという本は今日のように新刊で買う。松岡は、本を手に入れた時の姉の笑顔が一番好きだった。

休暇に入つてから数日が経過し、相変わらずの暑さの中、松岡は部屋でビジネス書を読んでいた。蒸すような夜にも関わらず、クーラーはつけていない。松岡は徹底した節約を旨としている。その時、携帯電話の振動音が聞こえた。メールではなく、電話である。姉にもしもの事があると考へ、松岡は電話には敏感だ。素早く携帯電話をつかむと、液晶画面に目を凝らす。「鈴木英明」発信者表示には同期の友人の名前があつた。松岡は安堵して、電話を通話中にする。

「お、松岡か」

鈴木とは松岡のお別れ会以来の会話だつたが、いつもの明るいムードメーカーの鈴木から暗いトーンが聞こえてきた。なにかあつたか？
「実はな、原口大吾、やつが亡くなつた」

松岡には、鈴木の言つていることがよくわからなかつた。亡くなる？どういう事だ？事故か？松岡は混乱する頭で状況を認識できない。鈴木はその後、淡々と原口が突然死であつたこと、お通夜は明日の夕方であることを告げると、早々と電話を切つた。松岡は、呆然としたまま次の日の朝までの記憶が無かつた。

すぐにでも豪雨がきそなどんよりとした夕刻の中、松岡は一人駅から原口家の葬儀場へと向かつていた。

”原口が死んだ・・・”

松岡はいまだ原口の死を認識できない。鈴木の電話によると原口は、朝起きて出社の準備をしている最中、急に苦しみだしてそのまま救急車に乗せられ、病院へ直行。しかし、到着した時には息を引き取つていたらしい。彼はこのところ猛烈に忙しく、過労死の疑いもしさやかれていた。松岡の気持ちは複雑だつた。出世競争に打ち勝つ

た彼がこんなことになるとは・・・ひょっとして自分が勝つていれば同じように死んでいたのだろうか?と思うと今の自分が亡くなつた後の姉の状況を想像し、薄ら寒い思いを感じる。また、それ以上に、憎くて堪らなかつた相手が死んだことに関じて、自分の中に沸き起つた、もちろん喜びとは言えない、しかし単純な悲しみともとれない不思議な感覚は、松岡を大きく困惑させていた。

葬儀場に入ると、見知つた顔がいくつも並んでいる。その中にせわしく動き回る同期の鈴木の顔を見つけた。

「お疲れ様」

鈴木は仕切り屋らしく、今回の葬儀でもいろいろと動いているらしい。受付で記帳をすませると、松岡は葬儀場へと入つて行つた。花束の中心に、原口の遺影がある。相変わらず人を魅了せずにはいられない笑顔だ。松岡は遺影を見て、じょじょに原口の死を感じ始める。腐敗した水を飲んだような不快感を覚え、松岡は喉元までせり上げる嘔吐物を必死に押さえた。

松岡は焼香を済ませると精進落としの場に入り、故人を偲ぶ席に加わつた。

二時間ほど経過し、参列者もほとんどいなくなつた頃、親族が皆の中に入り挨拶を交わしていた。原口夫人が挨拶している。聞くところによると、学生時代からの付き合いで結婚に至つたとの事。松岡は初対面だが、女性にもてた原口らしく、美しい女性であった。原口夫人は松岡と初対面の挨拶をすませるとはつとして、松岡に話したいことがあると切り出してきた。

「この度はご愁傷さまでした」

松岡は原口夫人に別室へ呼ばれ、和室で話をする事になつた。型通りの挨拶をすませると原口夫人をまぶしく仰ぎ見る。年齢は原口より一、三歳下と聞いている。清楚であり、しかし、年相応の色気をかもし出している。夫人は突然の死にもかかわらず気丈に正気を

保っていた。

「生前は原口が大変お世話になりました。」

決まり文句とはいえ、松岡にとっては違和感のある挨拶である。挨拶よりも早く話を聞きたかった。

「原口より松岡様のことは大変多く聞き及びしております。原口が松岡様に大変ご迷惑をおかけしたこと、松岡様のご退職の原因となつたことも。」

松岡は、原口夫人の切り出しに愛想笑いを返さざるを得ない。

「本日、私がお呼びだしてるのは他でもありません。松岡様に、原口の真意を伝えたいのでございます。」

原口の真意？松岡は意味がわからなかつた。奴の行動はただ俺を叩き潰すだけだ。邪魔な俺を払いのけただけだ。それ以外に、意味などあるのか？

「原口は、松岡様も知つての通り、対立する相手には容赦ないとこゝがあります。特に、相手が原口が認めるほどの力量の相手の場合、それはもう徹底的に叩くのです。」

原口夫人は顔をしかめた。

「高校時代、彼はボクシング部に所属していました。そこで、ライバルと凌ぎを削りあい、切磋琢磨していました。ところが、そんな大事なライバルを試合で一切容赦無く叩きのめし、廢人にしてしまいました。その経験を、彼は大悔やんでいました。でも、生まれ持つた性格なんでしょうね。松岡さん、あなたとライバル関係になつた時、その性格が再び出でてしまったのです。」

原口夫人はそこで止めると、息をついた。

「普段、主人は会社のことをあまりしゃべらないのですが、松岡さんのことだけは楽しそうに語っていました。『うちの会社にはすごい奴がいる。松岡は只者じゃない。やつは本物だ』と。そんな調子でしたので、私は常日頃から、松岡様はよほど仲の良い同僚だとい込んでいたんです。ところが、ある日、社内の私の知り合いより松岡様の退社の話を聞きまして・・・事の全貌がわかつたわけです。

私は主人に問い合わせました。

『なぜそんなことになつたの。あなたは松岡様の事をあんなにほめていたじやないの』と。主人は固く口を閉ざし、何も語りませんでした。』

松岡は当惑した。原口の自分に対する意外な評価、単純なうれしさではない複雑な思いが松岡の心を締め付けた。

「主人はあなたに友情を感じていたのだと思います。しかし、主人はある種の感情の示し方が不器用なんです。だから、これだけは信じてください。主人はあなたを無一の親友だと思つていました。あなたを心の底から認めておりました。だからといって、主人のご無礼を許してください、とは申し上げられません。でも、このことだけは松岡様に伝えたかった。』

夫人はぶるぶると震えると、言葉が続かなくなり顔を伏せた。

原口の死後、松岡はしばらく抜け殻のようになつていた。頭の中は、原口に対する憎しみと哀れみ、そして友情と呼べなくも無い複雑な感情がないまぜになつて混乱していた。そんな漠然とした日々を過ごしていたある日、原口の上司だった藤平から携帯電話に電話がつた。藤平はかつて師弟コンビとして松岡と共にコールセンタープロジェクトを推進し、最終的に分社化した段階で松岡を切り原口を取つた男である。今はコールセンタープロジェクトによって生まれた子会社の社長となつていた。松岡はいぶかしみながらも電話に出了た。

「ひさしぶだな」

藤平は相変わらずのダミ声で話しかけてくる。なぜか、久しぶりのお酒の誘いだった。

藤平とは会社の近くの行きつけの居酒屋で待ち合わせた。松岡は、藤平の部下時代、週に二回ほど藤平とよく利用していたが、藤平と部署が離れてからはそれっきり行つていない。藤平は多忙にも関わ

らず、先に来て松岡を待っていた。

松岡と乾杯すると、しばらくは昔話に花が咲いた。一時期袂を分かつたとはいえ、昔の「同じ目標に向かつて頑張っていた時期」の思い出話をされると松岡は忘れていた師弟の情を掘り起こされる。藤平が肝心の話を切り出したのは飲み始めから一時間ほど経った頃だった。

「原口の後釜に座ってくれ」

それが、藤平の申し出である。原口は子会社では専務の立場にあつた。松岡の傷ついたプライドを癒すには充分な誘いだ。しかしそんなことより、松岡のやりたかった仕事、そして原口に奪われてしまつた仕事が出来るのである。それに、収入がアップすれば病床の姉にも今より良い治療が出来るかもしれない。松岡は激しく心を動かされた。しかし、お酒の席でもあり、松岡は返事を保留した。

藤平と話をした次の日の深夜、松岡は電話の着信音で目が覚めた。発信元は病院である。姉の容態が急変したのですぐに来て欲しいとの事。松岡はTシャツに短パン姿で病院にかけつけた。

「お姉さんは大変容態が悪くなっています。」

松岡は病院の人気の無い深夜の待合室で、同じ位の年齢の医者からこう切り出された。

医者の話は「すぐに海外で心臓移植の手術を受けさせた方がいい。」

との事だった。心臓移植の手術は費用が極端に高い。その為、今まで手を出せないでいた。しかし、状況は許さなくなっているとう。

姉の急変から一日後、松岡は再び藤平からの電話を受けた。

「会社に戻つてくれば、まとまったお金を貸す用意がある。」

藤平はなぜか姉の病変を知っていた。そして、プレッシャーをかけてきた。

次の日、松岡は意を決してある人物へ電話をかけていた。電話を受けた人物は明らかに普段、松岡が付き合いのある人間ではない口調で喋っている。電話を切った後の松岡の表情は何かを思いつめていた。

藤平から誘いを受けて一週間後の水曜日の昼過ぎ、松岡は会社への道をとぼとぼと歩いていた。先日の藤平の提案に対し、返事をするために半月ぶりの出社をする。半月しか経過していないのに、すでに松岡には通勤風景が懐かしい。松岡はまだ心を決めかねていた。

待ち合わせは本社ビル十八階の会議室。十八階は社長室等の管理機能が集中しており、廊下は閑散としている。松岡は知り合いに会うと気まずいので会議室までに誰も合わなかつたことに安堵していた。会議室の扉をノックして中に入ると、そこには予想もしなかつた人物が待ち受けていた。アブロードコミュニケーションの社長、中井幸次郎その人である。

中井はいわゆる立志伝中の人物だつた。戦後の経済界に君臨し、経団連会長もやつた廣島虎雄の薰陶を受け、「廣島七奉行」といわれたほど経済界では有名人だ。もちろん、松岡も中井相手に何度もプレゼンし、業務を支援してもらつた経験がある。中井の隣には藤平が笑顔で立つていたが、やはりいつもより緊張しているらしかつた。

「松岡君、久しぶりだね」

社長からは他を圧倒するオーラが漂つており、松岡は即座にこの場から逃げ出したくなる。緊張した面持ちで挨拶を済ませ、双方ソファに座る。

「松岡君、既にこの藤平君から話があつたと思うが、原口君が突然のことでの、藤平君も大変困つているんだ。藤平君に協力してやれないか?」

カリスマからの直々の提案に、松岡は一瞬たじろいだ。これまでに

他人を何万回とイエスと言わせてきた社長直々の口説き。経験から

を決めた。彼は腹が据わるとずけずけものが言えるようになら

「今回の提案の背景が理解しかねます 私は亡くなつた原口同様 藤平さんとも感情の行き違いがあり、それはまだ解消されてないと思つております。その藤平さんが、退職直前になつて原口がいなくなつたから戻つて来いと言つ・・・虫が良すぎる話と思わないですか？」

松岡は、本音を語つていた。これまでの冷遇に対する怒りを思わず込めてしまった。社長は松岡の怒りに理解を示す発言をすると、懐からおもむろに封筒を取り出した。

「これは原口君の遺書とでもいべきものでね。松岡君、彼はなぜか自分の死期を悟っていたようなんだよ。」

「……」原口の遺書を出してなんだと囁つのだ。

は、さういふに語おう。松岡君の行場は廻口君の要望だ。廻口君はおそらく自分しかわからない体調の不良を感じて、突然の死に備え、家族と会社向けに遺書をしたためていた。その遺書の中に、自分の後継者として松岡君の名前が書いてあつた。

原口・・・お前は死んでも俺を悩ませるのか・・・。

松岡は先田のお通夜の原口夫人の告白に続き、大きな衝撃を受けた。原口・・・お前は死んでも俺を悩ませるのか・・・。松岡は、打ち合わせの場所には常に事態を幅広く想定して臨む。今回も例外ではなかつたが、遺書の話は松岡には想定外だつた。松岡は口の中が乾いてカラカラになるのを感じた。

しかし、原口の部下もあります。今中、近藤、彼らを抜擢する訳にはいかないのですか。彼らは私の目から見ても大変有能です。彼らなら充分役割を果たせると思いますが。

松岡から後ろ向きな発言が飛び出る。

「とぼけた事を抜かすな！！」

すかたず、藤平が怒声を浴びせた。

債権担当部署にいた事もあるこの男は、闇社会の男たちと渡り合つた経験も豊富だ。怒声の迫力もそこらのヤクザを凌駕する。

「彼らは所詮、営業マンなんだ。コールセンターの現場を熟知し、営業との架け橋の役割を担えるのは原口君亡き後、君しかいないんだよ。君ならわかるだろ？！」

「もちろん、状況を総合判断しての君の待遇も考えている。」

社長が置み掛ける。

「先日、藤平君から提案のあつた額に一割程度上乗せしよう。一度退職した上で、中途入社の扱いとなるんだ。年収はある程度勘案する事が出来る。独身とはいえ、お金は今後も必要になるんじゃないか」

病床の姉がいる事は藤平も知つており、今回の説得材料として用いてもおかしくない。あえて姉の話をしてこないところに、社長の巧みなところがある。

「それになにより、君の復帰は同期の原口の遺志なんだ。」

松岡は、サラリーマンの習慣としてのメリット・ディメリットを計算する。傷ついたプライドは高待遇によって癒されるだろ？ 会社からまとまつたお金が借りる事が出来れば、姉の心臓移植の手術代も出る。それに、やはり俺のやりたい仕事が出来る・・・。数分間の沈黙の後、松岡は口を開いた。

会社に決意を伝えた日の深夜、松岡の部屋では暗闇の中、荒い息と何かがしきりに動く音、そして何かが壁にぶつかる音がしていた。隣人の梅田次郎は先ほどからの騒ぎに閉口していた。

” 一体、隣は何をやってやがるんだ。八時ごろから四時間以上。いいかげん我慢にも限界がある。 ”

梅田は意を決して廊下に出た。廊下ではさうに音が大きく聞こえてくる。

「松岡さん、何やつてるんですか。こんな夜中に。いいかげんにしてくださいよ。」

梅田は鉄製の扉を叩いて抗議したが、扉の中では相変わらず騒々しい音が止まない。

頭にきた梅田は、扉の鍵が開いているのを確認するや、思い切って開けて中を見た。中は真っ暗だった。

「はあ、あんた、何やつてるの？」

ワンルームのマンションであり、扉を開けると部屋が見渡せる六畳程度の部屋だ。その真っ暗の中に、松岡がいた。

「なんだ、何の用だ。うるせえぞ」

松岡は上半身裸で梅田をにらみつけた。暗闇でその目は不気味に光っている。梅田からは、廊下から照らされる明かりで松岡の部屋の壁に立てかけられたマットレスが見えた。マットレスはところどころ破けており、中の緩衝材が無残に飛び出している。松岡はマットレスをサンドバッグ代わりに殴り続けていたらしい。梅田とにらみ合う形になつたその瞬間、松岡のまぶたの内にその日の会議のシーンが再現された。松岡は再び激しくマットレスを殴りだした。

「今回の「」提案、残念ですがお断りします。」

松岡は社長の中井と藤平に対し、強い口調で答えていた。

「なぜだ。何が不満だ？何が気に入らない？」

藤平はこれだけ言つてもダメかと言つた様子で、松岡をにらみつける。

その瞬間、松岡に思いがこみ上げた。これまでの会社からの自分に対する裏切り、仕打ち・・・松岡は多くの思いを言葉にして吐き出そうとしていた。思いつく限りの言葉が喉まで出掛けた。しかし、その思いは全て次の言葉に集約する。

「全てです。もうこれ以上、お話する事はありません。」

松岡は言つたきり、席を立つ。慰留に努めようとする社長の手を強引に払いのけ、松岡は部屋から出て行った。松岡は、訳のわからない怒りに煮えたぎつっていた。気がつくと、廊下の壁を殴りつけていた。

梅田は再び、松岡に対し激しい言葉を投げつけていた。

「いい加減にしろ！ うるさくて眠れないんだ！ 警察を呼ぶぞ！」

松岡は、突然、切れた。

「うおおおおおおー！」

松岡は、梅田に殴りかかって行つた。

史上最強の猛暑といわれた夏が終り、秋も深まってきた十月の終わりごろ、松岡は郊外の靈園に向かつて歩を進めていた。梅田に殴りかかり、逆にストリートファイトで鳴らした梅田の返り討ちを浴びてぼこぼこに腫れ上がつた頬は、二ヶ月間の時を経てすっかり直っていた。

靈園に入ると、入り口で桶に水を汲む。汲み終わると桶を右手に、大手ディスカウントショップの袋を左手に下げて靈園の半ばまで歩き、ある墓石の前で立ち止まつた。墓碑には「原口家之墓」とある。墓は手入れが行き届いていた。

「（）無沙汰だな。原口よ」

松岡は桶に汲んだ水を墓石に無造作に掛け始めると、墓石に話しかけるようにしゃべりだす。

「お前の後釜への（）指名、ありがとう。そして、遺志に添えなくて申し訳ない。俺はお前の後釜にはなれない。やつぱり、エリートは俺の柄じゃないよ。お前の後釜には有能な石田が就任したよ。大変だが、何とかやってるようだぜ。」

松岡は続ける。

「俺はどうしてるかって？ 俺はコスモス通信、結局行かなかつたよ。直前になつて断つちました。はは。」

「ん！？ 姉貴のことか？ 心配するとは原口らしくもないな。姉貴のことは大丈夫。」

松岡はおもむろにシャツのボタンを外す。腹部の上あたりに最近手術したと思われる跡が残つていた。

「腎臓、売っちゃった。しょうがないよな。お金が無いから。だから姉貴の手術費用は何とかなった。でも、やっぱり会社からの誘いには乗りたくなかつたんだ。」

「お前、やりたかつた仕事あつたよな。リモートコールセンターシステムの立ち上げ。あれ、お前の代わりに俺がやることにしたよ。コスモス通信じやそんなことできねえんだ。だから断つた。今日はこの俺が、そのシステムをコンサルする会社を立ち上げることの報告に来た。これが、お前の遺志に対する俺の返事だ。」

松岡はディスカウントショップの袋から缶ビールを出すと、墓石にかけ始めた。

「お前とは入社の頃だけよく飲んだよな。特に一人暮らしのお前と俺の家で。その時、お前このビール好きだつて言つてたる。沢山買つてきてるぜ。好きなだけ飲め。」

松岡はビールをじやぶじやぶとかけ続ける。その様はまるで優勝が決まつた時のチームメイトとじやれる野球選手のように楽しげだ。十分近く続く壮大なビールかけが終わりを迎え、松岡は空き缶を袋にまとめるが、突然、墓石の上台に両手を突き、顔を伏した。まるで墓石を押し倒そうとしているかのように。

「十五年間、ありがとう。」

松岡は、声を絞り出すと、顔を伏したまま嗚咽する。頬から滴り落ちる涙が水鉢を濡らした。喉がつかえた。言葉を発する事が苦しい。思いが奔流のように湧き上がつて来る。

「十五年間、俺を鍛えてくれてありがとう。俺の師でいてくれてありがとう。俺の兄貴でいてくれてありがとう。」

松岡の肩が震えていた。今、松岡は気付いていなかつた原口に対する友情を感じている。その思いを全て言葉に表す事は出来ない。言葉に出来ない己の衝動を、抑えきれない感情のうねりを松岡は体全体で発露していた。

松岡は思いをふつときるように顔を上げる。その顔には、己の決断に

殉する覚悟の思いがあった。

松岡は、墓石に別れを告げ、立ち去った。

誰もいなくなつた墓地。風も無いのに花束は震えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n76560/>

マグネットィック・フレンド

2010年11月7日15時29分発行